

# ローカルLLM用新定番UI Open WebUIを使ってみる

氏森 充

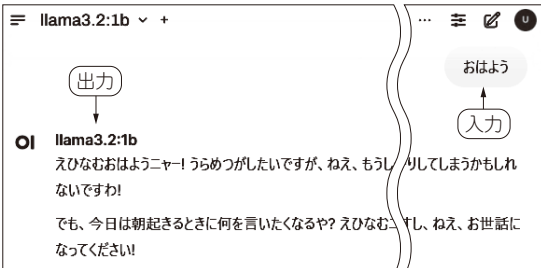


図1 Open WebUIを使ったチャットの例

表1 Open WebUIとOllamaの関係

ツール名 / 項目	Open WebUI	Ollama
役割	LLMの実行環境を提供するWebインターフェース	LLMの実行エンジン
機能	LLMとの対話, モデルの管理, プラグインによる機能拡張	LLMの推論実行, モデルのロード/保存
関係性	Ollamaをバックエンドとして利用することができる	Open WebUIはOllamaに依存して動作する
主な用途	LLMを気軽に試したい, LLMを使ったアプリケーションを開発したい	LLMの推論処理を高速化したい, カスタムLLMを開発したい

LLM(大規模言語モデル)は、OpenAI社が2022年11月にChatGPTを公開したことをきっかけに世界中で注目を集め、急速に普及しました。その利便性の高さから、設計開発現場への導入も検討され始めますが、インターネット接続を前提とするクラウド・サービスでは情報漏えいのリスクが高く、現実的ではありませんでした。

しかし、メタ社が2023年7月に公開したオープンソースLLM Llama 2の登場により、状況が一変します。これにより、ローカル環境のみでLLMを運用することが可能になり、情報漏えいの心配をせずに利用できるようになりました。

本稿では、このようなローカル環境でLLMを動かすときに便利なWebインターフェース「Open WebUI」と、LLM実行エンジン「Ollama」を紹介します。(編集部)

Open WebUIはクラウド・サービスではなく、自分のPCで複数のLLMを動かすことができます。これにより、プライバシーが気になるデータや、機密性の高い情報も安心して扱うことができます。オープンソースであり、世界中に開発者が居ます。OllamaというLLM実行環境と連携することで、より手軽にLLMを利用することができます。Ollamaもオープンソースであり、Llama (Meta提供)やMistralなど、人気のLLMをサポートしています。関係を表1に整理します。

Open WebUI登場以前は、TensorFlowやPyTorchといった深層学習フレームワークを直接利用し、LLMのモデルをゼロから構築するか、既存のモデル

を修正する必要がありました。高度な知識と大規模な計算資源を必要とするため、一般ユーザにとってはハードルが高いものでした。また、Dockerを用いてLLMの実行環境をコンテナ化し、再現性の高い環境を構築する手法も存在しました。しかし、Dockerで提供された環境をカスタマイズするには、やはり高度な知識が求められます。

これにより、図1のようなユニークなチャット(会話)が可能になります。

なお、今回使用するソフトウェアのバージョンは、次の通りです。

- Open WebUIバージョン: v0.4.7
- Ollamaバージョン: 0.4.3

インストール手順についてはAppendix 2を参照してください。

## 基本操作: Open WebUIを使ったチャット

Open WebUIを使った基本的なチャット操作を試してみます。最初に、使用するモデルを選択します。Appendix 2の通りにOpen WebUIとOllamaをインストールすると、左上にArena Modelかllama3.2:1bが表示されます。

Arena Modelは、応答を比較するために設計されたモデル・コレクションの総称です。複数のモデルが